

子どもの日常生活にみられる移行対象・空想対象に関する研究 —幼稚園児の保護者および児童養護施設職員への質問紙調査からの検討—

A Study of young children's utilization of transitional object and imaginary object in their daily life:
through a questionnaire survey for caregivers of kindergarten children and staff of group home children.

塚 越 奈 美*
TSUKAKOSHI Nami

要約：本研究は、幼稚園児の保護者と児童養護施設の職員を対象に、幼児のファンタジー行動を測定する質問紙調査を実施し、一般家庭と施設という生活環境の違いによって、それぞれの因子構造に違いがみられるのか、および、移行対象や空想対象などの出現率に違いがみられるのかについて検討した。その結果、ファンタジー行動尺度は、いずれも移行対象、空想の友達、ヒーロー空想の3因子構造であることが確認された。しかし、ヒーロー空想については因子を構成する項目数に開きがみられた。また、移行対象や空想の友達を保有したり、ヒーロー空想をしたりする子どもの割合は、いずれも入所児よりも幼稚園児に多い傾向があった。この背景を探るべく自由記述の内容を分析したが、それを十分に明らかにすることはできなかった。今後は、インタビューを通じたケース分析のような個別性を重視した調査を実施することで、子どもにとっての移行対象や空想対象の意味や役割を検討することが求められる。

キーワード：質問紙調査、ファンタジー行動尺度、幼児、移行対象、空想対象

I 問題と目的

愛着とは「乳児や若い人間以外の動物が特定の個体に対して情緒的に親密となり、その個体とともにいる時には落ち着く傾向のこと（APA心理学大辞典，2013）」をいう。子どもは乳児期を通して特定の人物に愛着を示すようになること、また、こうした愛着を示すことのできる人物（愛着対象）が得られない場合、情緒が不安定な状態となるなど、その発達に影響を及ぼすことが広く知られている（Ainsworth, 1978; Bowlby, 1969/1982; Ericson, 1963 他）。また、本稿で扱う移行対象や空想対象を持つことは、この愛着との関連で論じられることが多い。

Winnicott (1953) は、人生初期の母子関係の心理的変化を、生後しばらくの母子一体状態が継続している“絶対的依存の段階”から子どもが自分と母親とは別々の存在であると認識するとともに自ら必要とするときのみ母親を求める“相対的依存の段階”への移行であると論じた。また、この移行は漸進的なものであるとし、絶対的依存期と相対的依存期のあいだに「移行期」を想定している。この移行期（一般に1歳～3歳とされる）に観察されるのが、毛布、タオル、ぬいぐるみなどを常に自分の側に置いて接触できるようにしようとする幼児の姿であり、それらの対象物のことを移行対象（transitional object）と呼ぶ（Winnicott, 1953）。この時期、母親は徐々に子どもの欲求のすべてを満たそうとはしなくなるが、これは子どもにある種の喪失感を与えることになる。ここから

* 幼小発達教育コース

生じる不安を軽減し、母親への全面的な依存はもはや難しいという現実を子どもが客観的に受け入れていく移行過程をスムーズなものに導いてくれるものが、母の代理物としての移行対象であるとされる（池内・藤原，2004）。この移行対象は、子どもの情緒的発達において肯定的な役割を果たすとともに、どの子どもにも出現しうるものと想定されている（Winnicott, 1953）。

一方で、移行対象は母親との関係にストレスが生じた時に出現しやすいという点を強調する説もある。移行対象が出現する背景を探る論考に関しては遠藤（1989）が詳しいが、富田（2007）は遠藤（1989）の論考から「移行対象の出現には、母親との間の“ほどよい”関係の中で母親についての内的表象を獲得することが前提としてあるが、だからといって、母親との間に健全な関係を築いた子どもすべてが移行対象を出現させるかといえばそうではなく、子どもは時に状況に応じて、適応のすべとして移行対象を使用しうる」「移行対象が必要とされる状況として、子どもにとってのストレスが相対的に多かったり、母性的な関わりの減少が急速であったり、母親の養育行動や状況の変化が大きかったりした場合に、子どもは移行対象を出現させ、使用する」と紹介している。また、池内・藤原（2004）による母親を対象とした調査では、子どもが移行対象を所有していない母親群よりも、子どもが移行対象を所有していた母親群の方が有意に妻の夫婦関係における満足度が低いことが示されており、夫との関係に満足していない母親の子どもに、移行対象が出現しやすくなることが明らかにされている。

こうした論考や知見からは、必ずしも母親との良好な関係性だけが移行対象を求めるという行動の背景にあるのではなく、母子の関係性が子どもにとってストレスフルである場合や、母子の関係性の変化が大きかったり急であったりした場合にも、子どもは移行対象を求める可能性があるということになる。換言すれば、何らかの原因によって、家庭環境ないしは家族関係（親子関係）がその安定性を失った場合にも、子どもは移行対象を求めると考えられることになる。

いずれにしても、移行対象とは、伊原（2006; 2009）が指摘するように、子どもが追い求める母親像と目の前にいる現実の母親像との間に横たわる落差を埋めて、子どもの願望をかなえる働きを持つものであり、子どもが単に愛着対象の代理として執着する対象という位置づけを超えて、私たち人間が愛着対象と分離し自立に向かうというプロセスを支持してくれる対象であると考えられる。

次に、「空想対象」について論じる。これは、一般的には「空想の友達」と呼ばれるもので、「子どもが空想によって作り出した目に見えないキャラクターのことであり、幼児期の一定期間、子どもの日常の会話の中に出現する（Svendsen, 1934）」と定義される。移行対象は実在する対象物を通して愛着対象を表象（イメージ）しているのに対し、空想の友達は、目には見えないキャラクターを心的に表象したものである。この点に着目すると、空想の友達は実在するものを媒介しない点で高度な表象能力の獲得に伴って出現するものと考えられ、移行対象に関わる現象は空想の友達にかかわる現象に先行すると想定される（井原，2009）。ただし、実在しないものとやり取りする様子は奇異に感じられることもあり、適応に問題を抱える子どもに出現する特殊な存在とみなされることが多い。そのため、主に精神医学の領域において臨床的事例報告を中心に研究が展開されてきた経緯がある（Kanner, 1974; 大橋，1984など）。

しかし、近年の発達心理学においては、臨床的な問題を抱えていない幼児も空想の友達のような空想対象を有し、その心身の発達に重要な役割を果たしている可能性が想定されるようになってきている。また、内的な表象を実際の生活環境に定位する働きを投射と呼ぶが、内的に生み出した心的属性を外界に投影することは決して異常なことではなく、例えば、誰もいない空間に人の存在を感じるなどのように、私たち大人にもみられる活動であることが指摘されるようになった（中田・川合，2020）。事実、願いごとに対する幼児の認識を検討するために、筆者が幼児の保護者を対象におこなった質問紙調査では（塚越，2007）、その自由記述欄において「子どもに空想の友達がいる

(または、過去にいた)」ことや、「ごっこ遊び等で架空の存在になりきったり、魔法のような力の存在を肯定したりする姿がある」ことを肯定的に報告する保護者が複数存在した。この調査では「空想の友達」についてたずねた項目はないにもかかわらず、保護者からこのような報告が得られたことは、子どもが空想の友達のような見えない対象とやり取りすることや架空の存在になりきる姿が、問題行動としてではなく幼児らしく好ましい姿としてとらえられていると考えることができる。

以上のように、これまでの研究を概観すると、移行対象も空想の友達もその出現は否定的に捉えられる傾向が強いものではあるが、移行対象は子どもの心の支えの役割を果たし（井原，2009）、空想の友達は子どもの健全な発達に寄与するものとして評価する（Benson & Pryor, 1973）視点が示されてきたことを考えると、今後、こういった両義性の本質を明らかにする検討・研究が待たれるところである。

ところで、近年、児童虐待に関する制度的な充実が図られたことによる社会的な関心の高まりなども影響し、全国の児童相談所への相談件数は年々増加傾向にある（令和3年度版厚生労働白書，2021）。不適切な養育を受けたことを理由に児童養護施設に入所する子どもが増えているが、齋藤・向井・佐伯（2012）は、そうした入所児に関する研究は、彼らがどのような問題行動を示すかに焦点を当てたものにとどまっておき、子どもの施設適応や社会適応を支える内的要因を探求する研究がおこなわれてこなかったことを批判的に指摘している。そして、移行対象や空想の友達といった子どもが主体的におこなう活動を「ファンタジー行動」と定義し、児童養護施設入所児のウェルビーイングの観点からその出現頻度等を調べている。

この調査は、女子大生の母親と児童養護施設職員を対象に実施された。女子大生の母親には、調査時点で女子大生になっているわが子について、その幼少期を回想して答えてもらい、女子大生136名分のデータを得ている。児童養護施設職員には、調査時点で施設にいる子どものうち、年長児クラスと年中児クラスに在籍する子どもについて答えてもらい、30名分のデータを得ている。内容は幼児のファンタジー行動についてたずねるものであり、結果として移行対象因子、空想の友達因子、ヒーロー空想因子の3因子構造を見出している。移行対象因子に関する項目群は「肌身離さずもっている（例：タオルケットやぬいぐるみ等）ものがある」「不安になったり寝る前に必ず必要とするタオルやぬいぐるみ等がある」「特定のタオルケットやぬいぐるみに名前をつけてとても大切にしている」の3項目、空想の友達因子に関する項目群は「大人には信じられない存在（例：空想上の友達）を語っている」「空想した友達（妖精、架空の人物）について話をするがある」「自分の中で作り上げていた想像上の友達がいるようである」の3項目、ヒーロー空想因子の項目群は「おまごとかヒーローになりきるなどのごっこ遊びに大変夢中になっている」「遊んでいる最中にヒーロー・ヒロイン等になりきって独り言が多い」「実際には実在しないヒーローやアニメのキャラクターなどの存在を強く信じている」の3項目であった。また、移行対象、空想の友だち、ヒーロー空想それぞれの出現率を調べたところ、養護施設入所児は女子大生の幼少期に比べて移行対象や空想の友達は少なく、ヒーロー空想を多く持つという結果が示された。

この齋藤ほか（2012）の研究は、幼児が自らの心理的適応を図るためにおこなう内的活動としての移行対象や空想の友だちに注目し、その実態を明らかにしようとした点で興味深いだが、次のような点に検討の余地を残している。まず、齋藤ほか（2012）が示したファンタジー行動尺度の3因子構造は、児童養護施設入所児のデータが30名分と少なかつたため、女子大生の幼少期に関する回答と合算したものであった。つまり、女子大生の母親に娘の幼少期について振り返ってもらった回想データが、真に子ども時代の行動を反映したものであったとは言い切れず、ファンタジー尺度で得られた3因子構造が子ども全般の傾向としてとらえてよいかに関しては疑問が残る。また、出現率の差についても、女子大生については母親による回想データであるという点が影響している可能

性が否めない。養護施設入所児は女子大生の幼少期に比べて移行対象や空想の友達は少なく、ヒーロー空想を多く持つという結果は、児童養護施設入所児は、近しい養育者との分離を経験しており、それによる強い心理的な不安等をヒーローになるきることによって乗り越えようとしていたとも解釈することができるが、その項目群の行動は幼児全般にみられるものでもあり、回想データによる影響があった可能性が考えられる。また、先述したように、親子関係の不調から愛着の発達に問題があることが移行対象や空想の友達を生み出すとすれば、児童養護施設に入所している子どものほうがそれらを有する傾向が確認されるはずであるが、そのような傾向が確認されていない。ここからは、齋藤ほか（2012）の結果が、移行対象や空想の友達が幼児全般にみられる活動であると想定することが妥当であることを示唆しているように思われる。以上から、齋藤ほか（2012）で得られた養護施設入所児の傾向は、移行対象や空想の友達を持つことは、幼児が外界との心理的な適応を図るために自らおこなう積極的な内的活動であるという研究の着眼点にあるように、幼児全般にみられるのではないかと考えられる。

そこで、本研究では、現在幼稚園に通う子どもを持つ保護者と養護施設で幼児を担当している職員とを対象に、ファンタジー行動を測定する尺度（齋藤ほか，2012）を参考にして質問紙調査を実施し、生活環境の違いによってその因子構造に違いがみられるのか、また、その出現率にも違いがみられるのかについて比較検討することとする。移行対象や空想の友達がポジティブな役割を果たすものであり、それらを保有することが近しい養育者と離れて生活する子どもに特有のものではなく、むしろ幼児一般にみられるものだとすれば、ファンタジー行動の因子構造にもその出現率にも違いがみられないと予測する。

II 方法

1. 調査協力者と手続き

幼稚園児の保護者（以下、保護者）と児童養護施設の職員（以下、施設職員）を対象に質問紙調査を実施した。保護者に対しては、クラス担任を通して質問紙を配布し、園に子どもが2名以上通っている場合にはそれぞれの子どもについて別々の質問紙に回答するよう依頼した。施設職員には、担当する入所児のうち就学前の幼児について、複数を担当している場合はそれぞれの子どもについて別々の質問紙に回答するよう依頼した。

2. 調査時期

2012年12月～2013年3月であった。

3. 質問紙の内容

齋藤・向井・佐伯（2012）の「ファンタジー行動尺度（移行対象・空想の友達・ヒーロー空想に関する幼児の態度や言動を測定する項目で構成された質問紙）」を参考に作成した。齋藤ほか（2012）では、女子大生の母親に対する質問紙と児童養護施設職員に対する質問紙とでは項目数に違いがあり、児童養護施設職員に対する質問紙には女子大生の母親に対する質問紙には含まれない親子関係、家庭・家族関係に関する質問項目が設定されていた。しかし、これらの質問項目はファンタジー行動尺度の因子分析からは除外されていたため、本研究でも因子分析の対象としては女子大生の母親用の16項目を採用し、“あてはまる（4点）”～“あてはまらない（1点）”の4件法で回答を求めた。質問項目はTable1に示すとおりである。

また、本研究では移行対象や空想の友達、ヒーロー空想の具体的な対象・内容や子どもの様子について調べるために、以下の問1～4を設定し、自由記述による回答を求めた（Table2）。

Table 1 ファンタジー行動に関する16の質問項目

<ol style="list-style-type: none"> 1. 肌身離さずもっている（例：タオルケットやぬいぐるみ等）ものがある 2. 自分の中で作り上げていた想像上の友達がいるようである 3. 他の家の家族をうらやましく思うような発言や態度がしばしばみられる 4. 他者には見えない存在（例：空想上の友達等）について話すことがある 5. ヒーローやアニメのキャラクターなどが実在すると信じているようである 6. 通常では説明できないような存在（例：おばけ等）について現実のものとして語っていることがある 7. 想像で、未来の家族を作り上げているかのような言動がしばしばみられる 8. サンタクロースが実在していると信じている 9. 不安になったり寝る前に必ず必要とするタオルやぬいぐるみ等がある 10. 空想した存在（例：妖精、架空の人物等）について話をしている 11. 家族から（冗談も含めて）「あなたはもらわれた子だ」と言われたことがある 12. おままごとやヒーローになりきるなどのごっこ遊びに大変夢中になっている 13. よその家に生まれたかったと言ったことがある 14. 遊んでいる最中にヒーロー・ヒロイン等になりきって独り言が多い 15. 自分は「この家の家族じゃない」と疑うような発言がある 16. 特定のタオルケットやぬいぐるみに名前をつけてとても大切にしている
--

Table 2 自由記述の質問項目

<p>・問1. 「お子様が肌身離さず持っていたり・不安になったり寝る前に必要としたりするものは何ですか。具体的に教えてください」「上記のものにお子様が名前を付けていれば、その名前をお書きください」「また、特にそれを必要とする場面や印象的なエピソードなどを、できるだけ詳しく教えてください」</p> <p>・問2. 「お子様がやり取りしたりお話したりする、他者には見えない存在（例：空想の友達・妖精・架空の人物・その他）は具体的にどのようなものですか」「また、その存在にお子様が名前を付けていれば、その名前をお書きください」「この他者には見えない存在は、どのくらいの頻度で現れたり、お話の中に出てきたりしますか（※この箇所のみ次の選択肢から1つにチェックするよう指示した。→ごく稀に・1ヶ月に1回程度・2週間に1回程度・1週間に1度程度・ほぼ毎日）」「お子様の他者には見えない存在に関する語りややりとりで、印象に残っている場面やエピソードを教えてください」</p> <p>・問3. 「お子様が実在していると思っているヒーローやアニメのキャラクターは何ですか。具体的に教えてください」「また、印象に残っているエピソードなどがありましたら教えてください」</p> <p>・問4. 「このアンケートに関連しそうだと思われるお子様の日常の姿やエピソード、またはあなたご自身の思い出などがございましたら、お書きください」</p>
--

5. 回収状況と対象幼児の属性

調査を依頼した段階で、あらかじめ対象となる子どもの数を確認してから質問紙を配布したため、対象となる幼稚園児120名分、および児童養護施設入所児（以下、入所児）120名分の回答を得ることができた。対象幼児の内訳は、幼稚園児は、年少児25名、年中児50名、年長児45名であった。ま

た、入所児は、未満児22名、年少児28名、年中児29名、年長児36名、および在席する年齢クラスが判別できないが、年少児から年長児に該当する5名であった。

Ⅲ 結果と考察

1. ファンタジー行動尺度の因子構造に関する検討

齊藤・向井・佐伯（2012）による結果と比較するために、幼稚園児と入所児に関する16項目のデータそれぞれについて、因子分析をおこなった（最尤法・プロマックス回転）。その結果、Table3（幼稚園児）およびTable4（入所児）に示すように、どちらも3因子構造であること、また齊藤ほか（2012）の3因子を構成する質問項目とほぼ同じであることが確認された。

幼稚園児については、第1因子に対して負荷量の高い項目（0.50以上／以下同じ）は「1. 肌身離さず持っているものがある」「9. 不安になったり寝る前に必ず必要とするタオルやぬいぐるみ等がある」「16. 特定のタオルケットやぬいぐるみに名前をつけてとても大切にしている」の3項目であった。第2因子に対して負荷量の高い項目は「10. 空想した存在について話をしている」「6. 通常では説明できないような存在について、現実のものとして語っていることがある」「4. 他者には見えない存在について話すことがある」の3項目であった。第3因子に対して負荷量の高い項目は「14. 遊んでいる最中にヒーロー・ヒロイン等になりきって独り言が多い」「14. おままごとやヒーローになりきるなどのごっこ遊びに大変夢中になっている」の2項目であった。各因子を構成する項目間の内的一貫性を確認するためクロンバックの α 係数を算出したところ、順に、0.85, 0.70, 0.72と比較的高い値が得られた。

入所児については、第1因子に対して負荷量の高い項目は「16. 特定のタオルケットやぬいぐるみに名前をつけてとても大切にしている」「1. 肌身離さず持っているものがある」「9. 不安になったり寝る前に必ず必要とするタオルやぬいぐるみ等がある」の3項目であった。第2因子に対して負荷量の高い項目は「4. 他者には見えない存在について話すことがある」「10. 空想した存在について話をしている」「2. 自分の中で作り上げた想像上の友達がいるようである」の3項目であった。第3因子に対して負荷量の高い項目は「5. ヒーローやアニメのキャラクターなどが実在すると信じている」「12. おままごとやヒーローになりきるなどのごっこ遊びに大変夢中になっている」「14. 遊んでいる最中にヒーロー・ヒロインなどになりきって独り言が多い」「6. 通常では説明できないような存在について現実のものとして語っている」「8. サンタクロースが実在していると信じている」の5項目であった。各因子を構成する項目間の内的一貫性を確認するためクロンバックの α 係数を算出したところ、順に、0.84, 0.77, 0.76と比較的高い値が得られた。

第1因子については、幼稚園児と入所児で負荷量の高い項目数および項目番号のいずれもが一致していた。第2因子については、どちらも負荷量の高い項目数は3つであったが、項目番号が1つ異なっていた。ただし、異なった項目のどちらも、空想の友達の存在を意味する内容である点が共通していた。第3因子については、幼稚園児の負荷量の高い項目数は2つだったが、施設入所児の負荷量の高い項目は5つあり、幼稚園児の項目番号に3つが加わっていた。以上から、3因子構造であることと、すでに述べたように齊藤ほか（2012）の結果ともほぼ一致していたため、第1因子を〔移行対象〕、第2因子を〔空想の友達〕、第3因子を〔ヒーロー空想〕と命名した。しかし、ヒーロー空想因子については、それを構成する項目数が幼稚園児よりも入所児に3つ多いことや、齊藤ほか（2012）に含まれていた「実際には実在しないヒーローやアニメのキャラクターなどの存在を強く信じている」が幼稚園児には含まれないという点もあり、今後、この因子内容についてのさらなる検討が必要である。

Table 3 ファンタジー行動尺度の因子分析結果（幼稚園児）

項目	F1	F2	F3
1. 肌身離さず持っているものがある	.968	-.029	.041
9. 不安になったり寝る前に必ず必要とするタオルやぬいぐるみ等がある	.876	-.088	-.039
16. 特定のタオルケットやぬいぐるみに名前をつけてとても大切にしている	.601	.125	.008
4. 他者には見えない存在について話すことがある	.087	.546	-.003
6. 通常では説明できないような存在について、現実のものとして語っていることがある	-.154	.698	-.071
10. 空想した存在について話をしている	.003	.776	.090
12. おままごとやヒーローになりきるなどのごっこ遊びに大変夢中になっている	.044	-.008	.724
14. 遊んでいる最中にヒーロー・ヒロイン等になりきって独り言が多い	-.049	-.061	.971

Table 4 ファンタジー行動尺度の因子分析結果（児童養護施設入所児）

項目	F1	F2	F3
1. 肌身離さず持っているものがある	.801	-.032	.055
9. 不安になったり寝る前に必ず必要とするタオルやぬいぐるみ等がある	.749	.015	-.047
16. 特定のタオルケットやぬいぐるみに名前をつけてとても大切にしている	.835	-.043	.023
2. 自分の中で作り上げた想像上の友達がいるようである	.061	.079	.079
4. 他者には見えない存在について話すことがある	-.059	1.040	-.072
10. 空想した存在について話をしている	.047	.509	.086
5. ヒーローやアニメのキャラクターなどの存在を強く信じている	-.122	-.055	.755
6. 通常では説明できないような存在について現実のものとして語っている	-.077	.080	.618
8. サンタクロースが実在していると信じている	-.153	.029	.455
12. おままごとやヒーローになりきるなどのごっこ遊びに大変夢中になっている	.214	-.049	.635
14. 遊んでいる最中にヒーロー・ヒロインなどになりきって独り言が多い	.106	.095	.622

2. 移行対象や空想対象の出現率に関する検討

幼稚園児と入所児とでは、ファンタジー行動を示す傾向に違いがあるのかを調べるために、移行対象因子・空想の友達因子・ヒーロー空想因子を構成する負荷量の高い項目かつ幼稚園児と入所児とで共通の項目に絞って、質問項目に対する回答が「あてはまる」「ややあてはある」であった人数とその比率を算出した（Table5）。ただし、ヒーロー空想については、先述した通り幼稚園児と入所児、および先行研究との整合性が十分にあるとはいえないため、以下では検定から除外し補足的な考察に留める。

ファンタジー行動を示す子どもの人数と出現率は、移行対象因子については、いずれの項目においても入所児よりも幼稚園児に多い傾向がみうけられるが、第2因子である空想の友達については、幼稚園児と入所児の間に移行対象因子ほど大きな差がみられない。そこで、幼稚園児と入所児の各項目における出現人数に統計的に差があるかどうかを検定（ χ^2 検定）した結果、第1因子の3項目（項目番号1： $\chi^2(1) = 5.079, p < .05$ 、項目番号7： $\chi^2(1) = 9.920, p < .01$ 、項目番号11： $\chi^2(1) = 17.947, p < .01$ ）に有意差がみられた。一方で、第2因子の2項目については有意差がみられなかった。

これらの結果を、本稿の「1. 問題と目的」の箇所です示した予測に照らして考察すると、空想の友達については生活環境の違いに限らず幼児全般にみられる活動であるとする予測を支持する結果といえる。一方で、移行対象に関しては、幼稚園児のほうがそれを持つ子どもが明らかに多いこと

が示されており、一貫した傾向は得られなかった。いずれにしても、移行対象も空想の友達もその出現率はそれほど高くない。大人が気づいていないために報告されないという可能性もあるが、一般的には移行対象や空想の友達を持たない子どものほうが多く、それらを生み出す子どもがどのような特徴を有するのかという点について検討していく必要がある。また、ヒーロー空想については、齋藤ほか（2012）では女子大生の幼少期よりも入所児に多い傾向が示されたが、本研究において第3因子として共通して抽出された2項目は幼稚園児にも多くみられている。移行対象や空想の友達に比べるとその出現率は高い傾向にあり、この2項目については幼児によくみられる行動であるといえることができるだろう。

Table 5 各因子を構成する幼稚園児・児童養護施設入所児共通項目における出現数

項目番号	第1因子			第2因子		第3因子	
	1	9	16	4	10	12	14
幼稚園児	27 (22.5)	29 (24.2)	35 (29.2)	13 (10.8)	15 (12.5)	83 (69.2)	65 (54.2)
入所児	13 (10.8)	10 (8.3)	9 (7.5)	8 (6.7)	8 (6.7)	61 (50.8)	31 (25.8)

注 上段=人数, 下段=%。

3. 自由記述に関する検討

ここからは、移行対象や空想の友達、ヒーロー空想の具体的な対象・内容や子どもの様子について調べるために設定した自由記述（4問）について検討する。

（1）問1について

「お様が肌身離さず持っていたり・不安になったり寝る前に必要としたりするものは何ですか」という質問に対し、保護者40名、施設職員23名からの記述が得られた。このうち、保護者では「現在、そういった対象がある」という記述が38名、「過去にはあったが、現在はない」が2名であった。また、「現在、そういった対象がある」と記述した保護者うち2名は、過去と現在では異なったものを大事にしているということが報告されている。入所児については、全員が「現在、そういった対象がある」という回答であったが、そのうち2名については、対象物ではなく行為（指吸い）についての記述であった。Winnicott（1971/2015）によれば指吸は移行対象に先行する移行現象に含まれるものであるが、子どもが不安を落ち着けるために必要とするという点では、移行対象と同じ意味を持つものと解釈してよいものと思われる。また、子どもがその対象に名前を付けているかをたずねたが、名前がある場合もあれば、名前がない場合もあった。その扱いも大事にしているという共通性はあるが、抱いて眠る、話しかける、出かける時に連れて行く、世話をするなど子どもによって様々であった。

幼稚園児も入所児も、必要としたり大事にしたりしているものは、家族から贈られたものであったり、旅行先で家族に買ってもらったものであったりする割合が多いことから、幼児期の子どもにとっての移行対象は、他者との思い出や他者が自分を思ってくれていることを確認できるものであるがゆえに、特別なものとして扱われている可能性が高いことが示唆された。また、自由記述に関する施設職員の記述量は全体的に保護者に比べ少ない傾向にあったが、この項目に関しては、移行対象をくれた人物や子どもの姿が比較的詳しく記述されており、施設職員が子どもにとって移行対象が特別な意味を有するものであることを感じ取っていることがうかがえたことを追記しておく。

(2) 問2について

「お子様がやり取りしたりお話したりする、他者には見えない存在は具体的にどのようなものですか」とたずねた質問に対し、保護者20名、施設職員13名から「ある」という回答が得られた。入所児はすべて現在に関する回答だったが、幼稚園児は「過去にあったが現在は無い」とするものが4名いた。やりとりの頻度について、「ほぼ毎日」「週に1度程度」「2週に1回程度」「1ヶ月に1度程度」「稀に」から選択式で回答を求めたが、ほぼ毎日という回答もあれば、ごく稀という回答もあり、一般的な傾向を見出すことはできなかった。

(3) 問3について

「お子様が実在していると思っているヒーローやアニメのキャラクターは何ですか。具体的に教えてください」とたずねた質問に対し、保護者63名、施設職員59名から「ある」という回答が得られた。このうち、幼稚園児9名は「なりきって遊んでいるが実在しているとは思っていない」と記述されていたため、54名を対象とし、ヒーローやキャラクターの種類を分類した（1人の子どもに関して、複数のヒーローやキャラクターが挙げられる場合もあるため、延べ人数を算出した）。その結果、幼稚園児も入所児もウルトラマン・仮面ライダー・戦隊ヒーローといったヒーローと（幼稚園児43名、入所児50名）、プリキュアを中心とするアニメのキャラクター（幼稚園児39名、入所児22名）が多かった。子どもオリジナルのキャラクター（子どもが自分の空想力によって生み出したキャラクター）などは、幼稚園児で14名、入所児で5名だった。また、いずれも友達や兄弟など他者との遊びの中でそれらになりきって遊ぶ場合と、一人遊びの中でなりきっている場合との両方が確認された。いずれにしても、幼児期の多くの子どもが遊びの中でヒーローやキャラクターになりきって楽しんでいることがわかる。

(4) 問4について

「このアンケートに関連しそうだと思われるお子様の日常の姿やエピソード、またはあなたご自身の思い出などがございましたら、お書きください」という項目には、保護者38名、施設職員13名から回答が得られた。保護者の回答には、子どもではなく自身の幼少期に関する記述もあり、移行対象や空想の友達を持つ子どもの様子について、「自分もそのような子どもであった」というものもあれば、「子どもの反応を新鮮に思う」というものもあったが、いずれも否定的にとらえている様子はなかった。また、対象児の姉弟に関する記述もみられ、家庭環境としては似ているきょうだいであっても、移行対象や空想の友達を有するかどうかについては違いがあることが報告された。

入所児については、願望を交えた作り話に関する報告が印象的であった。例えば、外泊に行っただけなのに「お家にはプリキュアのおもちゃがある。お母さんに買ってもらった」「今度、お母さんとお父さんとハンバーグ食べに行く」「おばあちゃん家に行った」など、家族とのエピソードについて語るという記述がみられた（2名）。その他にも、職員の子どもになりたかったと語ること（1名）などが報告された。子どもは家族と離れている状況において、時に願望を満たすために想像の世界に身を置いたり、自分なりの物語をつくり出したりすることで、心の安定をはかろうとしているのではないかと感じられるとともに、その思いを汲み取ってくれる語る相手としての他者（本研究においては施設職員）の存在の重要性が示唆される。ただし、理想の家族について語るといった願望を交えた作り話は、保護者からも報告されており、その背景に関する検討が必要である。

IV まとめと今後の課題

本研究は、幼稚園児の保護者と児童養護施設の職員を対象に、ファンタジー行動を測定する質問紙を実施し、生活環境の違いによってその因子構造に違いがみられるのかに加え、移行対象や空想の友達などの出現率に違いがみられるのかについても検討した。その結果、ファンタジー行動は生活環境の違いによらず、移行対象、空想の友達、ヒーロー空想の3因子構造であることが確認されたが、ヒーロー空想因子を構成する項目数が違っており、さらなる検討が必要である。また、移行対象や空想の友達の出現率は、いずれも入所児よりも幼稚園児に多い傾向にあったが、本研究の自由記述においてその背景・理由を十分に探ることはできなかった。

Winnicottの理論では、子どもは内的現実にも外的現実にも属さず、それらを結び付けたり分離したりする場所（中間領域）をつくり、そこで内的世界と外的世界との調整をはかっており、本研究で注目した移行対象や空想の友達はその中間領域に属するものであるとされる（Abram, 1996/2006）。親しい他者との分離や思い通りにならない外界への戸惑いは、程度の差はあれど、幼児期の子どもの誰もが経験するものである。本研究の自由記述からは、幼稚園児も入所児も、家族を中心とした他者とのつながりに対する健気な思いを持っていることが示されていた。つまり、Winnicott（1971/2005）が述べるように、子どもは母親をはじめとする人的な資源との相互作用を、大人から強制されることのない遊び（ファンタジー行動）によって円滑化している可能性が考えられる。

子どもが移行対象や空想の友達、またヒーロー空想にまつわる活動に、子ども自身がどのような意味や役割を付与しているのかを明らかにするためには、今回実施したような量的な検討を中心とした研究では限界があり、個別のインタビュー調査などによって検討していく必要がある。そういった個別の物語の共通性を探ることによって、移行対象や空想の友達とまとめられる現象であっても、その役割や意味が異なる可能性を検討できるからである。また、子どもの持つ空想の友達が表面上消失したとしても、それは私だけの秘密裏の世界において空想の友達とやり取りするようになったのであって、空想の友達自体が消失したわけではないという解釈があり（麻生, 1991; 1996）、実際に、過去に空想の友達を持っていた者は、その後も空想の友達を持っているという報告もある（Toyama, 2019）。幼い子どもが移行対象や空想の友達について他者に語ることは難しいため、過去に移行対象や空想の友達を有していた（あるいは現在も有している）大人を対象に、その存在についてたずねるといった手法も今後は試みていきたい。

また、本研究では先行研究に倣い、部分的にはあるが、愛着の視点から移行対象や空想の友達の出現について論じた。しかし、本来存在しない他者がそこにいるように認識したり、無生物に心的属性を付与したりすることを、私たち大人も当たり前のようにしており、これをプロジェクションと呼んで研究する試みもはじまっている（鈴木, 2020）。確かに、私たち大人もまた、テーマパーク等で架空のキャラクターがあたかも実在しているかのように感じて楽しむことがあるし、またそれを他者と共有することもある。そういった研究の知見にも視野を広げながら、子どもと移行対象や空想対象との関係について今後も検討し続けていきたい。

V 文献

- Abram, J. (2006). *ウィニコット用語辞典*（館直彦，監訳）. 東京：誠信書房. (Abram, J. (1996). *The Language of Winnicott: A Dictionary of Winnicott's Use of Words*. H. London: Karnac(Books) Ltd.)
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C. Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment : A psychological study of the strange situation*, Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

- Benson, R., & Pryor, D. (1973). When friends fall out: Developmental interference with the function of some imaginary companions. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 21, 457-473.
- Bowlby, J. (1960/1982). *Attachment and loss. Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books.
- 麻生 武.(1991). 内なる他者との対話. 無藤 隆 (編), *ことばが誕生するとき：言語・情動・関係*. (pp.39-91). 東京：新曜社.
- 麻生 武.(1996). *ファンタジーと現実*. 東京：金子書房.
- 遠藤利彦.(1989). 移行対象に関する理論的考察：特にその発現の機序をめぐって. *東京大学教育学部紀要*, 29, 229-24.
- Ericson, E. H. (1963). *Childhood and society (2nd ed.)* New York : Norton.
- 池内裕美・藤原武弘.(2004). 移行対象の出現・消失に関する社会心理学的規定因の検討：生育環境と夫婦間ストレスの視点から. *社会心理学研究*, 第19巻, 184-194.
- 井原成男.(2006). *移行対象の臨床的展開：ぬいぐるみの発達心理学*. 東京：岩崎学術出版社.
- 井原成男.(2009). *ウィニコットと移行対象の心理学*. 東京：福村出版.
- 厚生労働省 (編). (2021). *令和3年度版厚生労働白書-新型コロナウイルス感染症と社会保障-*. 東京：日経印刷株式会社.
- 中田龍三郎・川合伸幸.(2020). 社会的な存在-他者-を投射する. 鈴木宏昭 (編), *プロジェクション・サイエンス心と身体を世界につなぐ第三世代の認知科学*. (pp.139-157). 東京：近代科学社.
- 齋藤千鶴・向井隆代・佐伯素子.(2012). 児童養護施設入所幼児のファンタジー行動の測定. *日本発達心理学会第23回大会発表論文集*, 146.
- 鈴木宏昭.(編).(2020). *プロジェクション・サイエンス：心と身体をつなぐ第三世代の認知科学-*. 東京：近代科学社.
- 塚越奈美.(2007). 子どもの願いごとに関する理解やその効力への信念に対する親の認識. *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*, 1(1), 33-44.
- 富田昌平.(2007). 乳幼児期の移行対象と指しゃぶりに関する調査研究. *中国学園紀要*, 第6巻, 127-138.
- Toyama, N. (2019). Development of integrated explanations for illness. *Cognitive Development*, 51, 1-13.
- VandenBos, G. R. (2013). 愛着. *APA心理学大辞典* (pp.3). (繁榊算男・四本裕子, 監訳). 東京：培風館. (VandenBos, G. R. (2007). *APA Dictionary of Psychology*. Washington, DC: American Psychological Association).
- Winnicott, D.W. (1953). Transitional objects and transitional phenomena: A study of the first not-me possession. *International Journal of Psychoanalysis*, 34, 89-97.
- Winnicott, D. W. (2015). 橋本雅雄・大矢泰士 (訳). *改訳遊ぶことと現実*. 東京：岩崎学術出版社. (Winnicott, D. W. (1971). *Playing and Reality*. London: Routledge.)
- Svendsen, M. (1934). Children's imaginary companions. *Archives of Neurology and Psychiatry*, 32, 985-999.